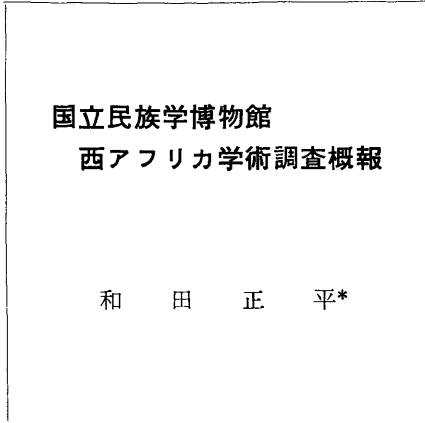


Preliminary Report of the West African Ethnographic Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004550



1. 計画の概要

1.1 計画の発端

昭和51年10月より、国立民族学博物館第3研究部では、共同研究のひとつとして「黒アフリカにおける物質文化の比較研究」を発足させた。これまで、部族本位に収集調査されてきた黒アフリカの物質文化を、各専門分野の立場から比較、検討するのが目的で、生産用具、生活用具、祭事具、装身具、住居等の各文化項目にわたり、各自のフィールド・ノートを総合し、分布、伝播、系統等の基礎的研究に着手した。

しかしながら、日本におけるアフリカ研究は、現地調査をはじめから20年にも満たず、昭和49年に創設された本館では、研究資料はもちろん、展示に必要な標本資料さえ、皆無に等しく、海外収集調査に館員を派遣する事業と併行して、物質文化に関する本格的な学術調査を実施することが急務になっていた。この緊急事情から、黒アフリカの共同研究班は、発足当初から、海外学術調査を目標に、

組織的な研究活動を続けてきたのである。

1.2 予備調査

昭和52年4月、研究代表者和田正平は文部省科学研究費補助金の交付を受け、7月から8月にかけての2カ月間、ナイジェリア、カメルーン、中央アフリカ、ザイール、ケニア、スーダンのアフリカ6カ国を訪問し、予備調査をおこなった。具体的には、各国駐在日本大使館の協力による情報収集、現地政府機関ならびに大学および研究機関との折衝による本隊の入国、査証、調査許可、携行器材の通関等に関する正式手続きの確認、本隊の調査地域を選定するための予察、わが国で入手困難な現地資料の収集等が主たる任務であった。

さて、予備調査を実施した状況から判断すると、ナイジェリア国は物質文化の研究にとって、もっとも興味深い国のひとつであったが、西アフリカ随一の高物価の国であり、ホテル事情も悪く、現地内に有力な支援拠点をもたないかぎり、経済的に破たんし、長期滞在はかなり無理な状況にあった。

カメルーン国においては、すでに日本の学術調査隊が受け入れられており、東京外国語大学(A・A研)との学術文化協定により、国立民族学博物館がおこなう学術調査に関しても同様な手続きをおこなうことが確認された。調査に関しては、共同研究班で論議された西カメルーンを対象地域とし、Bamun族、Bamileke族等の諸資料を収集した。

中央アフリカ帝国は、外国人の入国に対して厳しい監視体制をひき、調査に対して折衝の窓口も用意されてなく、大学

* 国立民族学博物館第3研究部

の組織も未整備であった。ここでは、現地のカトリック・ミッションを通じて、地域共通語として重要なサンゴ語に関する諸資料を収集したが、本格的な調査はきわめて困難な状況にあった。

ザイールについては、京都大学が政府所管の研究所 I. R. S. (Institut pour la Recherche Scientifique) と緊密な協力関係にあり、現地調査も進展しているので、北部地方の簡単な予察にとどめた。

ケニアについては、首都ナイロビに日本学術振興会の「アフリカ地域研究センター」があり、上田将、佐藤俊両駐在員から詳細な現地情報を聴取した。当初、ケニアの調査地としては北部のツルカナランドがあげられていたが、既にこの年(昭和52年)、一橋大学の「東アフリカ・環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会調査」がおこなわれており、翌昭和53年度には、京都大学の「ケニア北部乾燥地域における遊牧民、農牧民の生態人類学的研究」が予定されていたので、国立民族学博物館としては、調査地域の重複を避け、当分のあいだ資料の乏しい西アフリカの調査に集中するという共同研究班の計画をあらためて、現地で確認することになった。したがって、スーダン南部も、上ナイルのジュバを中心に **Dinka** 族の居住地域を予察したが、この地方も将来の調査予定地として残し、まずは、ハルツーム大学との学術出版物の交換をおこない、文献資料等の収集につとめたのである。

1.3 調査国の選定

このような予備調査の結果にもとづき、カメルーン国は予定どおり、第1次調査の対象国として計画にのせることになっ

たが、ナイジェリア国の調査が困難なため、西アフリカのギニア湾沿岸諸国のうちから、もう1カ国新しい調査国を選定することになった。幸いにして、研究代表者(和田)はナイジェリア滞在中、日本大使館からベニン国に関する最新の情報を得ていたことと、以前から親交のあった人類学民族学国際研究連盟副会長、F. N. Agblémangon 博士がユネスコ駐在トーゴ共和国大使であり、この国の入国や調査許可等について打診することが可能であったので、トーゴ・ベニン両国を新しい調査国として選定し、正式な折衝を開始した。その結果、昭和52年12月、トーゴ国文部省から本博物館長梅棹忠夫あてに、公式の承諾書が届き、本調査隊を受け入れるむね、解答をよせられた。したがって、期間内に承諾の返書がこなかったベニン国を断念し、第一次調査はトーゴ国とカメルーン国に集中することと決定したのである。

1.4 現地研究者の招へい

さて、カメルーン国については、研究分担者端信行と江ロー一久が東京外国語大学(A・A研)の調査隊員としてすでに野外調査を実施し、現地事情に詳しくあったが、トーゴ国は日本人になじみが薄く、在外公館はもちろん、商社の駐在員事務所もなく、西アフリカにおいて、もっとも情報の少ない国のひとつであった。そこで、緊急に資料を収集する必要にせまられたが、時宜をえて昭和53年3月、日本学術振興会、発展途上国科学協力事業により、トーゴ国大使 F. N. Agblémangon 博士を本館に招へいすることが可能になった。これは、トーゴ国の現地調査を前に最高の指導者からじかに、現地事情を聴取できる絶好の機会となり、滞在期間

中、「トーゴ国の総合的展望」等の講義をはじめ、共同研究班主催の講演「口頭伝承に関する社会学的研究」を快諾され、出身の Ewe 族の資料を公開された。また、現地調査の便宜供与を目的に、本国の友人および関係各位に紹介の労をとられ、現地の受入れ態勢を整えてくれた。以上の準備段階を経過して、昭和53年4月、文部省科学研究費補助金による本調査の採択が内定し、隊員構成、調査日程等の最終的なつめに入ったのである。

2. 調査の目的と内容

2.1 調査の目的

本調査は、熱帯アフリカに特有な物質文化を重点的に調査し、民族誌学的方法にもとづき、物質文化と部族社会との有機的な関連性をあきらかにするとともに、対象とする4つの文化領域、すなわち、西スーダンおよびギニア湾沿岸文化領域、東スーダン文化領域、コンゴ文化領域、東アフリカ牛牧文化領域の文化複合について比較考察し、熱帯アフリカ全体の文化を構造的に把握し、実証することを目的としている。

熱帯アフリカとは、北回帰線と南回帰線にはさまれた約2000万平方キロメートルにおよぶ大陸の中央部をさし、生態学的にはサバンナと森林が優勢な植生として環境を支配している。しかしながら、北部ではステップから世界最大のサハラ砂漠へ連続し、南部はカラハリ砂漠に接するため、周辺では乾燥地帯の影響をよく受けているのが特徴である。調査対象に設定した西スーダンおよびギニア湾沿岸文化領域、東スーダン文化領域、コンゴ文化領域、東アフリカ文化領域は、ハースコヴィッツが設定したアフリカ文

化領域に従っているが、おおむね熱帯アフリカに位置しており、一般的にも理解されている区分である。

熱帯アフリカの住民は、ほとんどがニグロイドであり、言語の構造、身体的特徴、地域分布にもとづいて、ギニア型、スーダン型、ナイル型、バンツール型、エチオピア型に分類されているが、この人種分類は文化領域とはかならずしも一致しない。ニグロイドの文化については、最近、ハースコヴィッツの領域設定がいく分修正されて、(1)モロコシ、マメ等の雑穀を主とするスーダン農耕文化、(2)イモ類を主とするギニア農耕文化、(3)マニオク・トウモロコシ等を主とするコンゴ大森林周辺の農耕文化、(4)ウシを主とする東アフリカの牧畜文化等に類型化されることが多いが、不確定な部分が多く、範囲も曖昧である。

2.2 調査の内容

このような熱帯アフリカの諸文化を全体的に把握しようとする場合、たしかに栽培作物や飼養家畜は重要な指標にちがいないが、それにともない、具体的な物質文化や技術体系、部族社会との関連については、ほとんど言及されず、抽象的な概念操作によって設定されている。それは物質文化の資料が基本的に不足しているところに大きな理由があり、統一的な方法論によって収集されていないからである。すなわち、文化領域、文化項目の分布状況の問題ではなく、製作技術、使用形態、伝播経路、系統性、そして認識体系を含む文化複合の追求であり、方法としては、物質文化の綿密な民族誌的記述と同時に、社会との有機的関連における意味分析が必要になる。この手続が、熱帯アフリカにおけるニグロ文明を究明

する基本であり、本調査が物質文化をとりあげる目的にはかならない。以上、本調査における研究対象としての4つの文化領域について、それぞれの特徴的文化項目をあげれば次のとおりである。

4つの熱帯アフリカ文化領域と特徴的文化項目

西スーダン文化領域およびギニア湾沿岸文化領域<王国形成にともなう農耕文化>

神像、マスク、造形美術、工芸品、金属細工、織物、刺繍、テラコッタ、バラフォン、ヒョウタン器、イスラムの伝統的衣服、帽子、ゾウリ、イスラムの木板、円型住居、弓。

東スーダン文化領域<スーダン農耕、漁撈文化>

焼畑農具、漁具、採集具、葦舟、牧畜用具、槍、楯、鼻飾り、脚輪、墓標、クラール、刃剣、枕、土器、発火用具、テント、運搬用皮袋、石臼

コンゴ文化領域<森林地帯農耕文化>

仮面、彫像、装飾品、儀礼用具、楯、弦楽器、木製太鼓、遊具、鉄製の鍬、ナイフ、婦人の結髪、張り出し丸木舟、縫合ボート、バスケットリ、罌

東アフリカ牛牧文化領域<牛牧・農耕複合文化>

牧畜用具、皮製品、皮袋、ヒョウタン器、木器、ふいご、ビーズ細工、象牙腕輪、刃剣、槍、楯、腕締具、指ナイフ、腰かけ、酒造具、鬚

3. 調査経過

3.1 隊員構成

隊長 和田正平 国立民族学博物館
 隊員 端 信行 同上
 江口一久 同上
 森 淳 大阪芸術大学
 和崎春日 日本学術振興会

の5名よりなるが、各隊員の主要調査国にしたがい、トーゴ班(和田・江口)、カメルーン班(端・森・和崎)の分担組織にし、現地における責任体制をあきらかにした。各班における現地政府機関との折衝の経過は次のとおりである。

まず、トーゴ班のばあいは、調査は大統領府で認可され、文部省から正式許可証が発行された。便宜供与は国立科学研究所 (Institut National de la Recherche Scientifique) の所長 Sossah Kounoutcho 氏の好意により、図書館、研究室の利用、および、2週間にわたるジープの貸与等、友好的におこなわれた。

また、カメルーン班のばあいは、国立科学技術調査機構 (Office National des Recherches Scientifique et Technique 略称 ONAREST) に分属する人文科学研究所が、受入機関となり所長 S. Ndoumbé Manga 氏から全面的な協力を受けて、調査はきわめて効率よく実施された。とくに、同研究所の Soh puis Bejeng 氏を本調査隊に参加させ、西カメルーンにおける調査に協力させたことは、学問の国際交流からいって有意義であり、カメルーン班は同氏を現地参加の研究分担者として、文部省に追加申請をし、隊員として登録したのである。

3.2 行動記録

トーゴ班

昭和53年9月1日～4日

Paris にて、トーゴ国のビザ取得、F.

N. Agblémangon 博士を訪問。

9月5日～11日

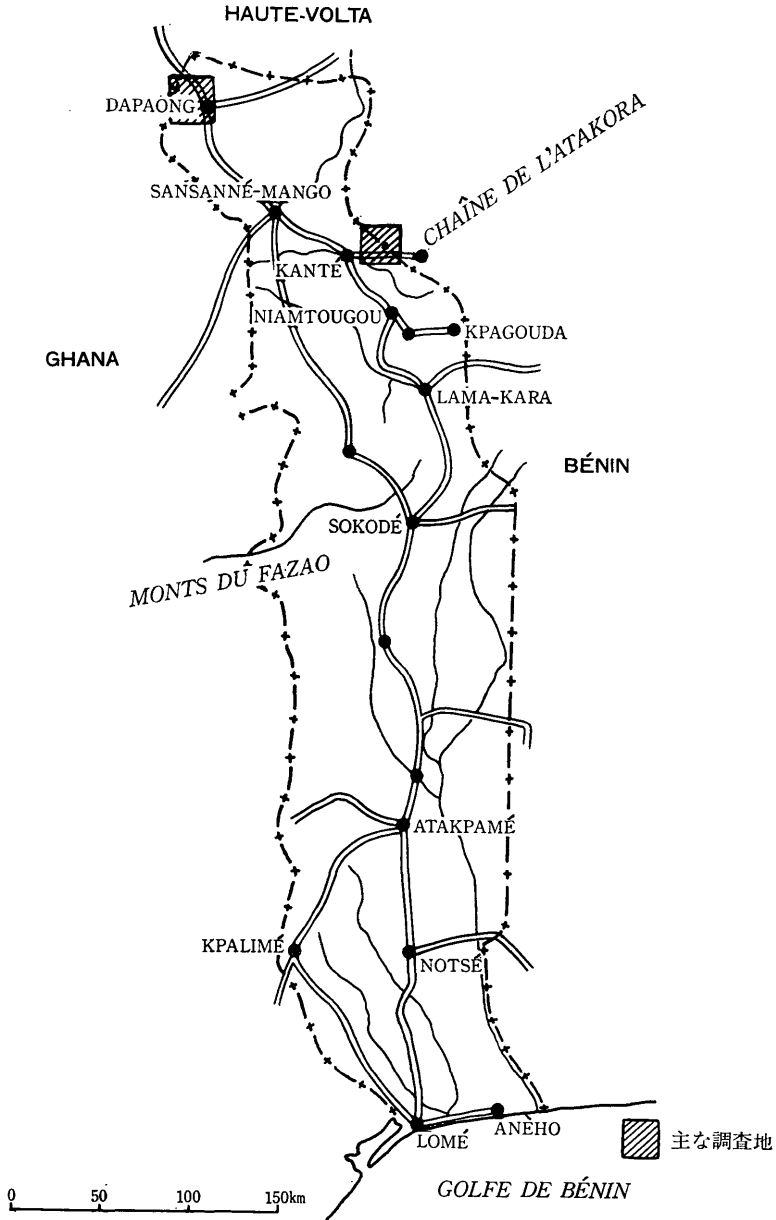


図 1

- 象牙沿岸国の首都 Abidjan に到着，北部州，Korhogo にて Senufo 族，Dyula 族の機織，鍛冶屋を調査，中部州 Agni 族の村落生活を視察。
- 9月12日～19日
トーゴ国の首都 Lomé に到着。調査許可取得のため事務折衝開始，国立科学研究所長 Sossah 氏，文部次官 Blakimé 氏訪問。
- 9月20日～28日
Lomé 周辺の農村，漁村の予備調査，および国立図書館にて自然環境，農業概況の資料収集，コピー作成。
- 9月29日～10月16日
西部丘陵地方の農業概況，および市場活動の調査。Kpalimé, Atakpamé, Notsé を一周踏査。
オランダの法人類学者 Rouveroy 氏から北部サバンナ地方の現況を聞く。長距離踏査旅行の準備。
- 10月17日
中部地方 Blitta, Sokode 方面の予察，Kotokoli 族の Uro (王)と会見，Gbuuro 村において農業概況の予備調査をおこなう。
- 10月20日
中部地方 Bassari の村にて Fulbe 族の家族を訪問。方言調査をおこなう。
Kpasa 村にて Fulbe 族集落の予察。
- 10月23日
Kara 地方の州都 Lama Kara における国際アフリカ法協会主催の「Séminaire sur Réforme Agrifoncière」出席。に Kabré 族の市場調査。Kpaguda, Kante, Nadoba を踏査し，Kabré 族，Losso 族，Lamba 族，Tamberma 族等の部族分布の状況に関して，Extensive な調査をおこなう。
- 政府計画農村 (Project F.E.D.) において，米作，酪農の実験農場の視察。
- 11月1日
北部サバンナ州 Dapango 市，Kombol Loogo 地区において Fulbe 族の予備調査。
- 11月5日
沿岸州にもどり，国立科学研究所との共同研究。この間，R.P.T. (トーゴ人民連合) の全国会議に出席中の F. N. Agblémangon 博士および G. Balandie 教授との懇談会に出席。
- 11月16日
和田はカラ州の Kante 県 Wartema 地区にて Tamberma 族の民族学的調査を開始，江口はサバンナ州 Dapango 県，Kombol Loogo 地区にて Fulbe 族，Moba 族の民族学的調査を開始，併行してトーゴ北部を中心に，土器，木器類の収集に従事。
- 11月30日
Ewe 族の地方都市 Assahon において儀礼用織布，樹皮布等を収集調査。この間，海外収集調査に従事している小川了氏が合流，国立科学研究所にて収集した標本資料の整理，梱包，発送。
- 12月14日～昭和54年1月31日
和田，江口はそれぞれ北部のカラ州，サバンナ州の調査基地にもどり，Tamberma 族，Fulbe 族，Moba 族の民族学的調査を継続。
- 2月1日～3月4日
和田は Atakora 山系の生態学的調査，および Nadoba における市場活動の調査，江口は Fulbe 族の方言調査と口頭伝承の採集。
- 3月5日
和田，江口 Kante で合流。

3月6日

トーゴ班, トーゴ政府機関関係各位に挨拶。

3月12日

カメルーン入国, Douala 経由にて首都 Yaoundé に到着, 江口は北部の Maroua にて Fulbe 族の補足調査, 和

田は Douala にて Bamun 族, Bami-leke 族の商業活動について聞きこみ調査, 江口は同所長に調査報告書を提出, ONAREST の人文科学研究所長 S. Ndoumbé Manga 氏に挨拶。

3月22日

和田, 江口, Paris 経由にて帰国。

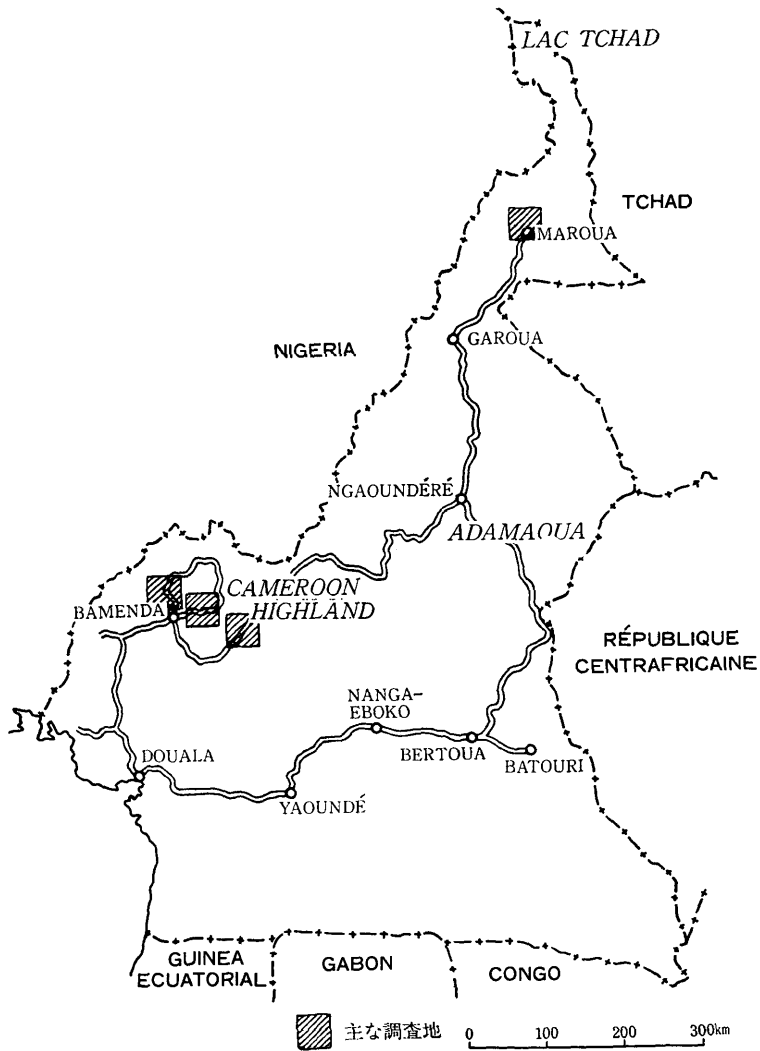


図 2

カメルーン班
 昭和53年9月1日～4日
 Parisにて、カメルーン国のビザ取得。
 F. N. Agblémangon 博士訪問。
 9月5日
 カメルーン入国。Douala 経由にて首都 Yaoundé に到着。ONAREST 人文科学研究所長 S. Ndoumbé Manga 氏に挨拶、同氏を通じて Directeur Général F. A. Gandji 氏と会見、調査許可証を取得。
 9月12日
 Yaoundé から Douala にもどる。調査基地の設営準備、Douala 周辺の予備調査をおこなう。
 9月17日
 北西部州の自然環境、農業概況の調査。州都 Bamenda にカメルーン班の連絡基地を設営。
 9月26日
 Bali, Batibo, Bamessing 等の諸地域において、端は農業地理学的調査をおこない、森は土器製作、地質の予察をおこなう。
 10月3日
 端は Bamenda 北方約 15 km の Nge-mba 系チーフダム、Mankon 地区に調査基地を設営、民族学的調査を開始する。森は、Bemenda 地区にて土器、織物、鋳造、ラフィア細工等の調査を開始する。
 10月26日
 和崎、カメルーン入国。端は、Yaoundé にとび、和崎の調査許可証取得および調査方法等について指導、Douala 経由で Bamenda 入りをはたす。
 11月7日
 和崎は Foumban にて Bamun 族の

都市宮廷文化について補足調査をおこなう。
 端は Mankon 地区にもどり、調査を継続。
 11月21日
 和崎は Foumban から北東約 20 km の Bamun 系の Manki 村にて民族学的調査を開始。
 昭和54年1月14日
 この間、端は中央アフリカ帝国の首都 Bangui にとび、Banda 族の予察をおこなう。
 1月15日
 端、森、和崎は Bamenda にて隊員会議をひらき、情報交換をおこなう。
 1月17日
 隊員はそれぞれの調査基地に復帰し、調査を継続。
 1月25日
 端、森は北西部州をおおうカメルーン・グラスランド諸地域を結ぶリング・ロードを踏査、Tikar 系チーフダム、Kumbo, Bansa, Nkambe 等を中心に、端はヤム・ベルトをめぐる栽培作物の調査、森は、土器製作の比較調査をおこなう。
 1月31日
 端、和崎はそれぞれ Mankon, Manki 地区にて調査を継続、この間、森は南西部州の諸地域 Lomé, Kumba, Mamfé 等をまわる。
 2月15日
 端、森、調査基地撤収、Douala にて資料整理、調査報告書の作成。
 2月20日
 和崎、調査基地撤収。
 2月23日
 端、森、和崎、Yaoundé に集合、S.

Ndoubé Manga 氏に挨拶, ONA-REST に調査報告書を提出。

2月27日

端は Douala, Paris 経由にて帰国(3月4日)。

和崎はケニア入国, 首都 Nairobi にて文献資料収集後セシユルス経由にて帰国(3月10日)。

森は, 沿岸地方にて補足調査後, Paris 経由にて帰国(3月12日)。

3.3 調査事項

調査はまず, 「物質文化調査票」にもとづく共通調査と, 専門的立場からおこなわれる特殊調査にわけられる。前者は, 比較研究のための統計資料を集積するのが目的で, 調査項目にしたがい, 各対象部族の住居空間における生活用具を記録する一般調査である。すなわち, 「物質文化調査票」は次の項目から成りたっている。

No 1. Face sheet: Country, Region/District, Village/Town, Ethnic Group, Family (Name, Sex, Age, Status), Date, Recorder, Code.

No 2. Location of Huts in Compound

No 3. Material Culture: Name, Local Name. Material(s) 1), 2), 3), 4). Maker, Means of Acquisition. Price. User's name (Sex, Age, Status). Usage. Plan & Side Views. Name of Parts (cm). Sketch.

この調査を基礎に, 各自の分担した対象部族を中心に, 民族誌的資料の収集につとめた。とりわけ, 今回, 専門的立場

からの特殊調査として分担した各自の主要テーマは次のとおりである。

政治

Bamun 族の王権組織——和崎

Ngemba 族の首長制——端

経済

Fulbe 族の農牧経済——江口

Tamberma 族の農牧経済——和田

Mankon 地域の経済変化——端

Bamun 族の商業活動——和崎

農耕技術

Ngemba 族の農耕技術——端

Tamberma 族の生業形態——和田

酒・油

Tamberma 族のソルガム酒製造——

和田

Bamun 族のパームオイル製造法——

和崎

家屋, 集落

Tamberma 族の住居形態——和崎

Bamun 族の住居形態——和崎

Ngemba 族の集落——端

宗教, 儀礼

Tamberma 族のフェティシズム——

和田

Moba 族の葬送儀礼——江口

Islam の宗教組織——和崎

Moba 族の傷痕——江口

Tamberma 族の傷痕——和田

Ngemba 族の結社——端

仮面, 祭事具

Ngemba 族の仮面製作——端

Foumban の仮面製作——和崎

Ngemba 族の祭事具——端

Bamessing 地域の王宮行事——森

土器

Moba 族の土器製作——江口

Tikar 族の土器製作——森

西カメルーンの土器分布——森
説話

Fulbe 族の説話——江口

Tamberma 族の説話——和田

以上、共通調査、特殊調査ともに、資料の整理および、分析結果に応じて、「国立民族学博物館研究報告」、その他関係学会等に発表する予定であるが、まずは、調査地域の概況をのべて、調査結果の予報としたい。

4. 調査結果—予報—

4.1 トーゴ北部の概況

◎自然と農業

トーゴは、日本ではほとんど知られていない国なので、まず、全体の概況を述べ、ついで、南部との比較において北部の特徴をあきらかにしたい。

この国は西アフリカでもっとも小さい国のひとつで、面積は56000平方キロメートル、ギニア湾に面し、間口が狭く、東西の幅が平均140キロメートル、奥行きは長く、約530キロメートルで、回廊の形をなしている。東はベニン、西はガーナ、北はオート・ヴォルタに囲まれ、人口は202万人(1971年)といわれる。

気候は、北緯9°を境に漸進的にかわるが、南部は、熱帯雨林と接続し、赤道型気候に属する。ただし、年降雨量が750ミリで、西アフリカとしては少なく、いくぶん過しやすいのが特徴である。沿岸地帯では雨季が2度あり、5月から7月にかけてと、さらに10月前後に急に湿度が高くなり、集中的な降雨にみまわれる。北部はサバンナ性気候で、雨季は1度、5月から10月までの長期にわたる。12月から1月は、サハラ砂漠から乾燥した熱風ハリマターンが吹くのが特徴で、暑さ

がきびしく、オート・ヴォルタに近い Dapango 近辺では34°Cの日が続く。

したがって、農業も、南部はマニオク *Manihot esculenta*、ヤム *Dioscorea* spp., タロ *Xanthosoma maffafa* 等の根菜類が多く、北部ではミレット *Pennisetum* spp., ソルガム *Sorghum* spp., フォニオ *Digitaria exilis* 等の雑穀類が主流になる。ソルガムは、特に Lama-Kara と Kante のあいだを南西にはしる Atakora 山系の北側に広がるサバンナ地帯において、さかんに栽培されている。米は、生産量は少ないが、南部にかぎらず北部でも栽培されていて、湿潤地域では二毛作のところもある。また、さつまいもの栽培はトーゴ全域でみられた。換金作物で注目されるのは、綿花の栽培で、Atakora 山系の一帯では重要な現金収入になっている。豆類は、ささげ *Vigna sinensis* がトーゴ全域において栽培され、食用にされているが、バンバラ・ビーン *Voandzeia subterranea* は北部が産地で、Moba 族の伝統的な作物である。豆科の樹木としては、ネレ *Vigna biglobosa* が重要で、北部のサバンナではバオバブとならんで保護されていた。トーゴは、生態学的には沿岸地方までサバンナがせまっているが、栽培植物からすれば、南部はギニア農耕の文化領域に属し、北部はあきらかにスーダン農耕文化領域に位置づけられるのである。

◎言語と部族の分布

さて、言語と部族の分布面からいっても、この国は、未開な Fazaio の無人地帯を境に、かなり明瞭な差異が認められ、南部はギニア型、北部はスーダン型の人種の特徴を示し、言語学的には、前者が Kwa 語系、後者が Volta 系と総称さ

れる。すなわち、南部は大部分、Ewe Ouatchi, Mina 等の諸族によって占められ、隣接するガーナから Fon 族、東方のベニン、ナイジェリアから Yoruba 族等が流入してくるが、そもそも、Ewe 族自体が Oyo Yoruba の子孫といわれ、これらは17世紀末以来、ギニア湾沿岸部に続く、通時的な移動としてとらえられ、共通の文化のいない手としてこの地域を構成している。

他方、北部はオート・ヴォルタを南下してきた部族が多く、Bassari, Gangan, Gurma, Komkomba, Moba, Tamberma, Tchambe 等が Paragurma 系、Kabré, Lamba, Losso, Naudemba, Ntribu, Temba 等が Tem-Kabré 系といわれる。ただし、Sansanné Mango 地方には、18世紀、象牙海岸から移動してきた Tyokossi 族がいて、今も Kwa 語群の Baule 語系統の言語を話している。そのほか、故国（ベニン）を離れ、トーゴで孤立した言語として、Bariba 語と Busa (Boussa) 語がある。また、地域性をほとんどもたない言語として Peul 語 (Fulbe 語)、Hoausa 語、Djerma 語等があり、使用者は各地に分散している。

しかしながら、D. Westerman 以後、この方面の研究はあまり進展しておらず、中部山岳部族の Adele, Akposso, Ahlo 等は、Togo-Restsprachen と呼ばれたように、現在も不明な部分が多い。とくに、ガーナとの国境附近に分布する言語は、方言といわれ、使用範囲も狭く、言語間の上下関係もあいまいである。このように、現在、トーゴでは方言を含めて50以上の言語が話されているというが、それぞれの言語を個別に地図にあらわす

のは、きわめてむずかしい。同様に、部族分布も R. Cornevin の手引き書のように、おおまかな面では把握されているが、資料が乏しく、精密な地理学的な境界を描くことは不可能に近い。ただ、第1次大戦後、フランス植民地当局が人口稠密な北部の Kabré 族、Losso 族を集団移住させた中部の Atakpame, Sokode 方面の居留地、Bassari 族の領域を開拓した Kabré 族の土地、隣国ベニン（当時はダホメー）の Parahoue 地方からモノ川東方へ集団入植した Ehue 族の領域等については境界が比較的明瞭にわかっているようだ。しかし、いずれにしても、複数部族の共生地域がふえ、南北の地域差もしいに薄れる傾向にある。

なお、トーゴは公用語としてフランス語が普及しているが、ここにも有力な部族語をひろめようとする運動があり、南部の Ewe 語、北部の Kabré 語が国営放送、ラジオ・トーゴ、日刊新聞、トーゴ・プレスにおいて部分的に使用されている。このばあい、Ewe 語は既に植民地時代初期から、教会中心に文字化が推進され、地域的な Lingua Franca として根づく地盤が成立したが、Kabré 語は放送局が設置された北部の Lama Kara を中心に、最近 Ewe 語とならぶ有力言語として研究が進められ、普及につとめられている言語である。

◎物質文化の特徴

さて、南部と北部をわける文化的特徴のひとつは、宗教であろう。16世紀からヨーロッパ人が渡来したギニア湾沿岸地帯では、最初、Anecho 附近でポルトガル人入植者が、カトリックの布教をはじめ、ついで、1840年ドイツがキリスト教ミッションをこの地に送りこんで、教化拡

大した。Ewe 族、Mina 族にキリスト教信者が多いのはこのため、首都 Lomé には、壮大な教会がある。ところが、北部は、伝統的にイスラム教徒の勢力がつよく、中部の Kotokoli 族も神聖王、Uro Eso が改宗してモスクをつくり、第1次大戦後もキリスト教を入れなかったという。北部に教会ができたのは最近のことである。

また、集落形態を比較すると、ヴォルタ川とモノ川にはさまれた南部の沿岸地帯に居住する Ewe 族、Uatthis 族は家屋を密集させて村をつくるが、北部のサバンナ地方では、Moba 族、Gurma 族のように、家屋のあいだに距離があり、散居制が多い。アタコラ山地に適応した Kabré 族や Losso 族は、斜面を利用した階段耕作をおこない、やはり散居制である。

一般に、中部から北部へかけて分布する山地民は、住居にくらべて衣服がほとんど発達せず、フランス統治時代、Kabré 族は腰布だけであったし、Tamberma 族は独立直前(1960年)まで、裸族にひとしかったという。1825年、南下したイスラム教徒が中部地方 Kotokoli 族のなかに定着し、足踏み式の織機をもちこみ、織物の技術を伝えたといわれるが、衣服は主としてイスラム化した Kotokoli 族の正装として普及したようだ。南部では、Assahun の機織が有名で、带状(約10 cm)の布地をつなぎあわせて一枚の織物に仕上げる。すなわち、小幅の無地やたて縞の布に、地の部分と交互に、あるいは連続して色彩豊かなよこ縞や単純な幾何学模様をパッチ・ワーク風に織りこんでいるのが特徴である。現在では、飛び抒装置をもった高機もあ

り、仕事場はなかば観光化している。注目すべきは、デザインも技術もガーナの Ashanti 文化とほぼ一致していることであり、Ewe 族の王の伝統的着衣になっていることである。

土器については、南部では Ewe 族による美しいつやのある彩文土器の製作がさかんで、北部は表面の荒い刻文と縄文が主流になる。ただし、江口隊員が調査したトーゴ最北に位置する Moba 族は、刻文・彩文・縄文の組合せによる大小様々な種類の土器を製作していて、用途も広く、地方市場を通じて他部族の需要におうじている。詳細はすでに「季刊民族学」9号に報告されているので、これを参照されたい。ただ、文様について気がついたことは、北部の Kabré 族が刻文、縄文の土器文化に囲まれながら、特異な彩文土器の技術をもっていることで、これは今後の調査によって追求すべき課題となった。

さいごに、謎の鉄文化について述べなくてはならない。北部は現在、鍛冶の原料は外部にたよっているが、Komkomba 族の Bandjeli には、土製の直立炉が残っている。円筒形で底部から木炭で加熱して、鉄を採取したと思われる。おそらく、16世紀末、古スーダン文化をになった人々が、この地方に集団移動して採鉄技術を伝達したと推測される。オート・ヴォルタの Tankodogo との関係が深いかもしれない。がしかし、謎の部分が多い。南部がベニン文化の延長に位置しているのに対し、北部は古スーダン文化に結びついているのである。

4.2 カメルーン高地の概況

◎自然と農業

かつてイギリスの信託統治下にあった

いわゆる西カメルーンは、現在、カメルーン連合共和国を構成するふたつの州から成っている。それは North-West 州と South-West 州である。西カメルーンの南半を占める South-West 州では、火山峰である Cameroon 山や Rumpi 山塊を除いて、そのほとんどが海拔高度 300 メートル以下の平地からなっているのに対して、北部に位置する North-West 州では、海拔高度 1,500 メートルを越す Bamenda 高地を中心に、ほとんどの地域が 900 メートル以上の高地からなっている。

この North-West 州を占める高地は、東に隣接する West 州にも拡がり、いわゆるカメルーン高地を形成している。このカメルーン高地一帯は、年間 1,500 ミリから 3,000 ミリの降水量をみ、その年平均気温は 20°C から 22°C までである。降雨は雨期の 4 月から 10 までの 7 カ月間に集中し、乾期の 5 カ月間はほとんど降雨をみない。

こうした自然的基礎にあって、カメルーン高地の潜在植生は、ギニア・サバンナが卓越し、海拔高度 1,500 メートル以上の高地では山地グラスランド（草地）となっている。

しかし、このカメルーン高地は、カメルーン国でも、最も人口密度の高い地域であり、地域によっては、1 平方キロ当りの人口密度が 100 を越すほどである。こうした人口の集中は、カメルーン高地の潜在植生を後退させ、現在では、カメ



写真1 建造中の Tamberma 族の住居
北部トーゴ・カンテ県ワルテマにて
江口一久撮影 1978.10.

ルーン高地一帯は広大なグラスランドが卓越し、カメルーン高地がカメルーン・グラスランドと呼ばれるゆえんとなっている。

この地方での一般的農業は、このグラスランドあるいはサバンナにおける焼畑農業である。焼畑で栽培される作物は、タロ *Colocasia esculenta*、マカボ *Xanthosoma sagittifolium*、ヤム *Dioscorea* spp., マニオク *Manihot esculenta* などのイモ類が中心で、雑穀としてはトウモロコシ *Zea mays* がかなり広く栽培されている。またこの地域では散居村落が一般的で、点在する住居のまわりには菜園が作られ



写真2 畑地の伐採を行うマンコンの女たち。カメルーン高地。端 信行撮影 1979.1.

ており、そこではプランティン *Musa* spp., バナナ *Musa* spp. が植えられており、その樹間にコーヒー *Coffea* spp. が栽培されている。コーヒーはこの地方の農民の換金作物の中心で、農民経済の中心ともなっている。また、この地方の農民の生活で無視できないのが、高地を網目のように刻んでいる小流に沿って植えられているラフィアヤシ *Raphia* spp. の存在で、農民の日常生活の中では、このヤシから採集されるヤシ酒は欠かせないものとなっている。なおこのラフィアヤシは、後述するように、この地方の人の生活の中での物質文化においてもきわめて重要なものとなっている。

このように、グラスランドの景観に代表されるカメルーン高地の農業は、基本的にはイモ類やバナナを中心とする根栽農業であり、換金作物としてのコーヒーや、物質文化やヤシ酒の材料としてのラフィアヤシ、さらにはアブラヤシなどの樹木作物に彩られているのである。

◎言語、部族、首長制社会

カメルーン高地に居住する住民は、G. P. Murdock の分類による、いわゆるカメルーン高地民 Cameroon Highlanders である。このカメルーン高地民の言語については、D. Westermann 以来、いろいろ議論のあるところであるが、いずれも、それらが Bantu 系諸語に分類されている点については一致がみられる。そして、このカメルーン高地民の言語が、隣接する Nigritic 系諸語の影響や、さらにはその痕跡が認められる Khoisan 語や Chad 語の影響などによって、特異な言語形態を示すグループであると認められているのである。

そして、カメルーン高地民の特異な言語形態は、その社会組織によってより一層特異なものになっていると考えられる。その社会組織とは、首長制である。この首長制についても、いくつかのレベルがあり、一概に論じることが出来ないが、原則的には、この地域の首長制社会は、

言語系統を同じくするという部族的拡がりよりは下位にあり、文化的・社会的統合はこの首長制社会を基礎にしているといえる。したがって、このカメルーン高地では、文化的・社会的な意味での部族的統合はきわめて弱く、住民意識の面でも首長制へのアイデンティティがきわめて強いのが一般的である。

したがって、この地域において、いわゆる部族分布を述べることは、その民族誌を分析するうえで、さほど大きな意味をもたないと思われる。しかしながら、隣りあう首長制社会で言葉が通じあうかどうかといったレベルでの、共通の文化的背景を考えるならば、そこにいくつかの部族的拡がりを認めることができる。

それは、North-West 州においては、Tikar 族、Widekum 族、West 州においては、Bamileke 族、Bamun 族である。カメルーン高地を4分するこれらの部族的拡がりとは、その首長制社会との関係について、次にふれておくことにする。

Tikar 族は、North-West 州の中央部からその東部、北部にかけて広く分布する。それらは数多くの首長制社会に分かれているが、その大部分は、数カ村から十数カ村を支配する規模の社会であるが、North-West 州東部を支配する Bansow 社会は、最も規模が大きく、数十カ村を支配している。

North-West 州の南東部に分布する Widekum 系の首長制社会は、その規模において Tikar 系のそれと大差はないが、Meta 地域や Ngie 地域においては、その規模はさらに小さくなり、一村ごとに首長をいさぐ、いわば政治的に独立した村落から構成されているのが特徴的である。ここでは村落がひとつの首長制社

会となっているのである。

ちなみに、今回の調査において、端が調査したのは Widekum 系の Mankon 首長制社会であり、森が調査したのは、Tikar 系の Bamessing 首長制社会であった。

同じカメルーン高地であっても、こうした社会的状況は、West 州においてはいささか様子が異っている。というのは、部族的には West 州の東半を Bamun 族が、西半を Bamileke 族が占めているのだが、このいずれも、部族的統合をとげている社会といえる。この場合の部族的統合は、村落レベルの支配者として、North-West 州の例とさほど差のない首長が存在しているのであるが、それらの首長の上位に、さらに大首長 paramount chief が部族的統合の象徴として存在しているのである。

したがって、この West 州の場合においては、部族的統合と首長制社会との整合が認められるわけである。今回の調査において和崎が調査した Bamun 社会は、まさにこのような社会であった。

このようにカメルーン高地の社会は、さまざまなレベルの統合形態をもつ首長制社会によって特色づけられているわけで、そこには、1カ村が独立した首長をもつという形での首長制社会から、数カ村あるいは数十カ村を支配する首長制社会、大首長によって部族的統合をとげた首長制社会まで存在しているのである。

◎物質文化の特徴

カメルーン高地の物質文化の特徴は、その自然的条件や生業形態（根栽型焼畑農業）、首長制に代表される社会組織、伝統的技術の体系、宗教観念、さらには海外からもたらされた商品の導入をめぐ

る文化変容などの、さまざまな側面がからみあって成立している。ここではそれらを概観するにとどめる。

まずはじめに、この地域の農民生活の物質文化をみて気づくことは、この地方の伝統的物質文化が、ラフィア文化だということである。

カメルーン高地では、どの農民も高地を刻んでいる小流に沿って、ラフィアヤシの植えこみを所有している。それは、ヤシの幹から採集するヤシ酒が彼らの生活に欠かせないという以上に、彼らの生活がラフィアヤシと深く結びついているからである。ラフィアヤシの幹は、まず住居そのものを建てるのに不可欠である。壁にそして屋根に、使われる木質の材はこのヤシの幹のみである。

そもそもこのカメルーン高地では、手に入る真直ぐな材は、このラフィアヤシの幹しかない。あとは、アブラヤシの幹ぐらいのものである。したがって、ラフィアヤシの幹は、住居を建てる時に使うほか、ベッド、棚、椅子、ニワトリ小屋、ブタ小屋など、住居をとりまくさまざまなものに使われる。またラフィアヤシの葉の葉柄は、カゴやバックなどの織物の材料になる。そしてその機織の機具もラフィアの幹でつくられている。ラフィアの幹を薄く切って、それらは編んで天井や屋敷がこいの扉に使われる。とにかくラフィアヤシの全体が、実にいろいろに利用されるのである。この地方の人びとの言語生活では、ラフィアヤシは、葉から根元まで細かく名称がつけられていて、そのラフィア文化の一端を示しているといえよう。

伝統技術という点では、このカメルーン高地は、ひとつの特色をもっている。

というのは、この地方で特徴的なラフィアの織物のほか、彫刻、土器造り、カジ屋、真鍮鑄造などが、いくつかの首長制社会によって、集中的に保持、伝承されていることである。それはあたかも伝統技術をいくつかの首長制社会で分業しているかのように思われるほどである。ラフィアの織物は、Mbengui, Bali, Bafreng, Bamessing の各首長制社会、彫刻は Babanki 首長制社会、土器造りは Bamessing 首長制社会、鍛冶屋は Nja-Itu 首長制社会、真鍮鑄造は Bafreng, Fouban 首長制社会となっている。

そして、こうした技術が首長制と結びついて、独特の造形文化を作りあげ、それがアフリカン・アーツの分野でカメルーン・グラスランドというひとつのジャンルをなしていることは、つとに知られているところである。

こうしたカメルーン高地の伝統技術が、首長制を象徴する物質文化と結びついて発展したものであることはいままでもないが、この地方の人びとの宗教観念とも結びついたものとして、仮面がある。仮面儀礼はこの地方の人びとの埋葬儀礼と結びついたものである。仮面を所有するのは限られた個人であるが、仮面儀礼は仮面の所有者を中心にした結社の中で運営されている。

全体的にみて、カメルーン高地における物質文化をめぐる文化変容はかなり急激な変化をみせており、土器造りや鍛冶屋の技術の衰退が著しい。また住居も日乾しレンガを用いて、トタンを屋根に使用する例が増加しており、ラフィアヤシの意味も若干の変化をみせている。またカメルーンの他の地域に比べて、カメルーン高地の人びとは、新しく海外からも

たらされた商品に対して、相対的ではあるが、強い関心を示す。これも、現代の社会経済的環境の中でのカメルーン高地の人びとの物質文化を織りなす特徴といえよう。

5. 研究成果のとりまとめ

本調査の研究成果は、口頭では、すでに1979年6月2日～3日、大山市京都大学霊長類研究所で開催された、第16回日本アフリカ学会学術大会において全員によって報告された。講演題目は次のとおりである。

国立民族学博物館西アフリカ学術調査報告。

1. 概況ならびにトーゴ北部タンベルマ族の住居形態（和田）
2. トーゴ北部モバ族の土器（江口）
3. カメルーン西部バムン族の家造り（和崎）
4. カメルーン西部ティカール族・バメッシング地域における土器製作技法（森）
5. カメルーン西部ンゲンバ族、マンコン地域、仮面その構成と儀礼、結社をめぐって（端）

また、1979年10月6日～7日に東京外国語大学（A・A研）で開催された日本民族学会・日本人類学会第33回連合大会においても、

1. バムン族の祭事具——王権と村落統治との関連から——（和崎）
2. カメルーン高地における首長制と仮面のシンボリズム（端）

の二つの研究成果が報告されたのである。

誌上では、資料の整理・分析結果に応じて「国立民族学博物館研究報告」および関係学会誌等に論文として発表する予定であり、さらに、一般的には、「季刊

民族学」に公表し、啓蒙紹介にもつとめる所存である。

相手国への還元としては、プリリナリレポートは、すでに、それぞれの相手国へ提出済であるが、欧文出版「*Senri Ethnological Studies AFRICA*」に寄稿し、現地の研究機関へ配布する予定で準備を進めている。

さいごに、本調査に全面的に協力してくれたトーゴ国立科学研究所および、カメルーン国立科学技術調査機構（ONAREST）に深く感謝の意を表したい。また、お世話になった文部省・日本貿易振興会・国立民族学博物館管理部等の関係各位に心からお礼を申し述べたい。

なお、本稿は隊員（研究分担者）の一致した協力により、和田正平（研究代表者）が執筆したが、4.2 カメルーン高地の概況については、とくに、カメルーン班長・端信行から適切な協力助言をもらい、もとなる原稿を書いてもらった。一言、付記しておきたい。

文 献

- CHILVER, E. M. and P. M. KABERRY
1967 *Traditional Bamenda, The Pre-colonial History and Ethnography of the Bamenda Grassfields*. Ministry of Primary Education and Social Welfare and West Cameroon Antiquities Commission.
- CORNEVIN, R.
1969 *Histoire du Togo*. Berger-Levrault.
- 江口一久
1979 「モバ族の土の器」『季刊民族学』9: 28-43. 日本民族学振興会。
- EYONGETAH, T. and R. BRAIN
1974 *A History of the Cameroon*. Longman.
- GREENBERG, J. H.
1963 *The Languages of Africa*. Indiana University.

HINTZE, URSULA

- 1959 *Bibliographie der Kwa-Sprachen und Der Sprachen der Togo-Restvölker*. Akademie-Verlag.

森 淳

- 1979 「西カメルーンの土器」『日本美術工芸』昭和54年7月号。日本美術工芸社。

MURDOCK, G. P.

- 1959 *AFRICA Its Peoples and Their Culture History*. McGraw-Hill Book.

PHILLIPS, T. A.

- 1977 *An Agricultural Notebook*. Longman.

SEBEOK, Thomas A. (ed.)

- 1971 *Current Trends in Linguistics* Vol. 7. Mouton.

WESTERMANN, D.

- 1927 *Die Westlichen Sudansprachen und ihre Beziehungen zum Bantu. Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen* Vol. 30. Berlin.

- 1956 *Die Togo Restvölker und ihre Sprachen. Tribus*.